孔祥吉著『清人日記研究』

本書（A5 判，[16+] 2+17+399 頁，広州，広東人民出版社，2008 年 6 月）は，清末を対象に広く研究を手がけてきた孔祥吉氏が，当該時期の官僚が記した日記を紹介しつつ，それらを利用して考察した論考を中心に編集したものである。著者は，『晩清佚聞叢考——以戊戌維新為中心』（巴蜀書社，1998 年）をはじめとする戊戌変法期の研究と並行して，翁同龢の日記・書簡など，多くの史料の整理・出版にも携わってこられた。その成果の一部は，すでに『晩清史探微』（巴蜀書社，2001 年）に収録されている。本書は，『晩清史探微』所収の袁昶『乱中日記残稿』および惲毓鼎『澄斎日記』に関する 2 編を含めた，12 編の論文で構成される。また「自序」によると，収録された文章のうち「栄慶其人与『栄慶日記』」は戴逸との共著，畢永年『戊戌政変日記』および張蔭桓『張蔭桓日記』を取り上げた 2 編は村田雄二郎氏との共同研究による成果とのことである。

最初に考察されるのは，『翁同龢日記』である。翁同龢は，咸豊年間の状元で，軍機大臣・戸部尚書などを歴任し，同治帝・光緒帝の教育係を務めた人物である。彼の日記は，清末の研究にすこぶる有用であるが，1925 年の出版当初から（書名は『翁文恭公日記』），刪改の可能性が指摘されてきた。この問題について孔氏は，出版された日記と，翁同龢の後裔である翁萬戈氏が所有する日記原本とを対照することで様々な角度から言及し，例をあげつつ刪改された箇所とその経緯をまとめている。なお明記されているわけではないが，本論文は，孔祥吉・村田雄二郎「『翁同龢日記』改削史実」（『中国研究月報』650，17 ～ 28 頁，2002 年）に，第五節を増補するなどして改稿したものと思われる。

本書で最も詳細に検討されているのは，『那桐日記』である。那桐は葉赫那拉氏の出で，内務府満洲鑲黄旗人，光緒年間の挙人である。日清戦争後から清朝滅亡に至るまで，軍機大臣・総理衙門大臣・戸部尚書などの重職を歴任した。日記は，従来あまり注目されてこなかったが，記述は 1890 年（光緒十六）から 1925 年（民国十四）までの 36 年に及び，日清戦争・戊戌政変・義和団事件・光緒新政・辛亥革命などの重要事件における那桐自身の経験が記される。本書では，この日記を那桐の経歴とあわせて考察するとともに，西太后や慶親王奕劻，袁世凱ら清朝の中枢にいた人物との関係が検討される。また，巻末附録として「『那桐日記』重要事件与人物索引（光緒十六年至宣統三年）」が掲載されており，利用の便が図られている。なお『那桐日記』は，近年，北京市檔案館の編集で標点本が出版されている（『那桐日記』北京，新華出版社，2006 年）。

この他，唐烜『留庵日鈔』および張之洞『張文襄公辞世日記』を用いた論考や，金梁『近世人物志』をもとにした清末の日記に関する考察が収録される。また清朝の官僚ではないが，数年前に新聞などでも報道された宇都宮太郎の日記を利用した，張之洞に関する分析もある。これは，日本人の日記中にみられる清末の官僚に関する史料を発掘・検討したものとして興味深い。

本書で取り上げられる日記には，『翁同龢日記』をはじめ，古くから利用されてきた著名なものも存在する。しかし清末の日記は，有名であっても書かれている内容をつかみにくく，利用に困難がつきまとう。その意味で，本書の価値は高いと言えるだろう。

（大坪慶之）

『籌辦夷務始末（同治朝）』

清末の政治史・外交史を研究するうえで必須の史料の一つに，『籌辦夷務始末』がある。『籌辦夷務始末』は，アヘン論争のはじまった1836年から同治年間の終わりである1874年までをカバーする官修の史料集であり，「道光朝」八十巻・「咸豊朝」八十巻・「同治朝」一百巻からなる。もとは軍機処が外交関係の執務参考用として皇帝の代ごとに編集していたもので，それを清書した稿本が内廷に保存されていた。1929年から30年にかけて故宮博物院が，内廷保存の稿本を影印出版している。戦後になってからは，影印本をもとに中華書局が，1964年に「道光朝」の，1979年に「咸豊朝」の標点本を出している。本書（A 5判，全10冊，北京，中華書局，2008年11月）は，中華書局が残る「同治朝」の標点本を出版したものである。

『籌辦夷務始末』「同治朝」は，1880年（光緒六）に寶鋆等によって編纂され，1861年8月（咸豊十一年七月）～1875年1月（同治十三年十二月）を扱う。上諭・廷寄・摺片・照会・条約などの檔案3200余件を収録し，内容的にも太平天国・洋務運動・辺境問題・条約締結・教案など重要な案件を数多く含む。編纂スタイルは，「道光朝」「咸豊朝」と同じく，当時の外交に関する上諭・上奏文などを日付順に並べている。また，上奏文に書き加えられた硃批も保存されている。『籌辦夷務始末』は，上諭を中心に収める『大清実録』とは異なり多数の上奏文も掲載するが，原文の全てが載るわけではなく多少の省略があることには注意を要する。

本書は，『籌辦夷務始末』の原書が持つ欠点を補うことを，整理・編集の方針として掲げている（巻一～巻八四は中華書局編集部が，巻八五～巻一百は吉林大学文学院の李書源が整理）。指摘される原書の主な欠点は，次の通りである。まず，収録されている檔案に題名がつけられておらず，詳細な目録がないことである。次に，上奏文の発信日が省略され，北京で受理された日付しかなく，それを基準に配列されていることである。最後に，誤字・脱字があり，同一の人名・地名の表記法も統一されていないことである。これらに鑑み，本書では利用の便を図るため，以下のような形で手が加えられる。

第一に，文字を活字にして標点を付す際に，内容に基づく段落分けを行い，原書にある抬頭をなくす。第二に，各檔案に題名と通し番号をつけ，それらを用いた詳細な目録を作る。第三に，原文の日付は干支による旧暦表記なので，西暦および新暦の日付を注記する。第四に，誤字などは校訂を施し，注として括弧書きで挿入する。また，初歩的な校勘も同時に行う。第五に，本文中に引用されている檔案については，本書や「道光朝」「咸豊朝」の標点本における巻数・通し番号を示す。地方官による奏摺の発信日を明示し，「上年」「本年」「上月」な